

がんばってまーす

公害苦情対応で思うこと



市マスコットキャラクター「いづみ姫」と筆者

京都府木津川市市民部まち美化推進課主任

ねごろ りょうこ
根来 良子

木津川市は、近畿のほぼ中央、京都府南部の山城地域に位置し、南は奈良県奈良市と隣接しており、京都・大阪の中心部から30km圏内にあります。市の名称の由来にもなっている木津川が市域の中心部を東西に流れており、木津川をはじめ豊かな自然・里山などが多く残されている一方で、最先端の研究機関が立地する「関西文化学術研究都市」の中核都市でもあります。



また、天平12年(740年)には聖武天皇が造営した恭仁京があったことから、日本の首都であった歴史もあり、さらに京都府内では京都市に次ぐ数の国指定有形文化財を有するなど、歴史ロマンがあふれるまちです。

全国の自治体において人口減少が課題となる中、平成19年に旧木津町・加茂町・山城町の3町が合併して木津川市が誕生して以降、人口

が1万人増加しています。市の将来像として「子どもの笑顔が未来に続く 幸せ実感都市 木津川」を目指し、魅力あるまちづくりに取り組んでいます。

公害苦情対応の所管課であるまち美化推進課には正職員9名が在籍しており、まち美化係と環境推進係の2つの係があります。

まず、まち美化係では、家庭ごみの収集・処理をはじめ、ごみの減量化や再資源化の啓発、不法投棄対策、動物の飼養管理などを担当しています。

そして環境推進係は係長1名、主任2名の計3名で、公害苦情対応のほか、騒音・振動の各種届出、環境調査、地球温暖化防止対策、市営墓地の管理、こどもエコクラブなどの業務を担当しております。

私は平成20年度に採用され、今年で15年目になりますが、これまで配属された部署の中でも、ここまで苦情が多いところは初めてでした。

当課に寄せられる苦情の中で、一番多いのはごみに関するものです。「ごみが収集されなかった」、「ごみの集積場所が散らかっている」など、ほぼ毎日のように電話がかかってくる。

公害に関する苦情は月に数件あるかないかですが、一番多いのは野焼きの苦情です。そのほか、工事現場の騒音苦情や生活騒音、「川に油が流れ込んでいる」といった水質汚濁に関する苦情、悪臭苦情などです。

ここで、私に対応に苦勞した事例を2つご紹介したいと思います。

1つ目は、原因不明の悪臭苦情への対応です。

ある住宅街で、複数の住民から「夜間に下水のような臭いがする」との相談がありました。日中に課職員や下水道担当課で現場周辺を調べましたが、臭いを感じられませんでした。

相談者にも、臭いがした日時、方向、風向きなどを記録してもらうよう依頼し、その報告を聞いても、原因は特定できず、やむを得ず夜間にも調べに行きましたが、やはり臭いがしません。ちょうど夏の時期で、草の中をかきわけながら歩いて蚊にさされたり、道ばたをはいつくばって排水溝を臭ってみたり…。

臭気測定を行っている業者に問い合わせましたが、「何月何日のこの地点で臭気を測定してほしい、という依頼なら対応できるが、日時と場所が不特定の臭いの調査は対応できない」とのことでした。

こうした苦労は報われず、結局、原因は分からずじまいのまま、苦情も次第に途絶えました。このような原因不明の悪臭苦情の対応はとても難しく、かなり頭を悩ませました。

2つ目は、野焼きの苦情対応です。

木津川市は自然が豊かで、昔ながらの田園風景が魅力の一つとも言えるのですが、一方では野焼きの苦情があとを絶ちません。相談者は田畑に隣接するニュータウンに引っ越してこられた住民などが多いのですが、ほとんどの苦情がただちに違反とはいえない、農業での稲わら等の焼却に関する内容です。

洗濯ものに臭いがつく、家の中まで臭いがするなど、相談者が困っている状況は理解できるのですが、農家さんからすれば昔から行ってきた必要最小限の野焼きであり、明確な判断基準がない中、どこで折り合いをつけるべきか悩むことがあります。

続いて、最近の公害苦情について私が思うことをお話したいと思います。

昔の公害は大きな工場の大気汚染による人体への悪影響などが問題となっていました。最近

の公害苦情では日常生活における生活騒音・野焼きなど、いわゆる「ご近所問題」による苦情が増えています。

ご近所問題の特徴としては、公害としてのレベルは低く、多くが法的規制の対象外であることが挙げられます。

こうした苦情相談の原因の一つとして、よく言われるのが地域コミュニティの希薄化であるように、「近所付き合いがないため原因者がどんな人物か分からないので、苦情を直接言えない」と市役所に相談される方が大変多いです。

しかしながら、ご近所問題の場合、多くがモラルやマナーの問題であり、普段から顔を合わせてお互いに声を掛け合えるようなつながりがあれば、また少しの工夫や周囲への気配りがあれば、地域の中で解決できるようなものばかりです。

私は大学生のときに、不登校児童が通う適応指導教室でボランティアをした経験があります。適応指導教室でボランティアや指導員と交流することで、児童たちが少しずつ学校にも行けるようになっていたり、明るくコミュニケーションがとれるようになっていたりする様子を目の当たりにし、「人と人とのつながりが一番大事」と感じました。そこで、こうした地域におけるつながりを作ることができるのは地域の行政、つまり市役所だと考え、本市の採用試験を受けることとなりました。

まさか環境部局に配属されて、「人と人とのつながりが大事」と再認識するとは夢にも思いませんでした。

ご近所問題で悩む住民にとって、原因者の第一印象は悪いかもしれませんが、自分が困っている状況を伝えることが、住民同士がお互いを思いやれる地域コミュニケーションのきっかけになるかもしれません。こうしたご近所問題は誰もが加害者になってしまう可能性があります。現代社会に求められる、地域の中で助け合い、思いやれるコミュニティを作るためのヒントが、公害苦情相談の中にも隠れている気がします。